

## 田山花袋作『少女病』を読む —メディア都市 TOKIO の誕生(1)—

勝 又 正 直

### Reading Tayama Katai's "The Girl Watcher": The Birth of Media City TOKIO (1)

KATSUMATA Masanao

キーワード：メディア、市電、交通  
Key words: Media, Streetcar, traffic

#### 1 はじめに

江戸幕府崩壊後、急激な人口減少を経験した東京も、明治後半になって帝都として整備されるにつれ、中央集権の国家の巨大な首都としてしだいにその姿を現し始める。

都市が「結節機関の集合体」(鈴木栄太郎)であるならば、東京がさまざまなもののコミュニケーションの結節点として立ち現れはじめたのが明治後半である。コミュニケーションの媒介をするものをメディアと呼ぶならば、東京はメディア都市として立ち現れてきたといえよう。ではそれはどのように現れてきたのか。

本稿は田山花袋の『少女病』<sup>1)</sup>という小説の分析を通じて、東京がメディア都市としてどのように立ち現れてきたのか、その一端を探りたいと思う。

#### 2 『少女病』：市電という名の欲望

##### (1) あらすじ

田山花袋の『少女病』という作品は明治40年5月1日の『太陽』に発表された短編である。

まずそのあらすじを紹介しよう。

小説は郊外の貸家から代々木の停車場に向かう主人公の描写から始まる。主人公、杉田古城(「過ぎた固執」?)は37歳、小説家。もっぱら少女小説を書いている。かつては一世を風靡したこともある。しかし清純な少女へのあこがれに終始するその作風は飽きられ、いまでは雑誌の編集でなんとかか生活をしている。盛りを「すぎた」彼の唯一の楽しみは通勤電車で美しい女学生を見、妄想にふけることである。彼は停車場で女学校出の娘や女学生の姿を物色する。知人たちのうわき話から、どうやら彼は、妻子持ちであるにも関わらず、オナニストであるらしいことが知れる。甲武電車に乗り、さらに市電へと乗り換える。主人公は車中で女学生たちを見、接触しながらうっとりとする。出社すると少女趣味を編集長にあざけられる。夢のない仕事と生活に死にたいような気持ちになりながら、彼は帰宅の電車に乗る。東京博覧会帰りの客のために市電はたいへんな混雑。しかたなく彼は電車のデッキの真鍮棒につかまって乗っている。そのときもう一度会いたいと思っていた美しい女学生をガラス越しに見つけ、心を奪われる。しかし急な電車の加速に手をすべらした彼は、線路上に転がり、反対方向から来た電車にひかれ死んでしまう。

名古屋市立大学看護学部(社会学)  
Nagoya City University School of Nursing (Sociology)

## 田山花袋作「少女病」を読む

## (2) 女たち

この小説の中では8人の女が登場する。それをまず出てくる順に列挙してみよう。

女1：「二十二三」歳ぐらいの「庇髪の女」。「鶯色のリボン、繻珍の鼻緒、おろし立ての白足袋」。代々木停車場から「すくなくとも五六度は其女と同じ電車に乗ったことがある」。主人公はこの女の家まで突き留めている。

女2：いつも代々木から牛込まで同乗する娘。留針を拾ってやったことがある。「白いリボン」はでな縞物に、海老茶の袴を穿いて、右手に女持の細い蝙蝠傘、左の手に紫の風呂敷包。

女3：妻。「二十五六」歳ぐらい。「旧派の束髪」木綿の縞物の着物。

女4・5：代々木からの車中での二人の娘。年上の方は、「縮緬のすらりとした膝あたりから、華奢な藤色の裾、白足袋をつまだてた三枚襲の雪駄、ことに色の白い襟首」。もう「一人の肥った方の娘は懐からノートブックを出して頻りにそれを読み始めた。」

女6：千駄ヶ谷駅から乗った「不器量な、二目とはみられぬような若い女」「反歯、ちぢれ毛、色黒」

女7：「見慣れたリボンの色」「四谷からお茶の水高等女学校に通ふ十八歳位の少女」

女8：かつて信濃町から一度だけ同乗し、もう一度逢いたいと思っていた令嬢。朝の電車では見あたらず。帰宅のお茶の水からの甲武線（現在の中央線）で車中に発見。「白い襟首、黒い髪、鶯茶のリボン、白魚のような綺麗な指、宝石入りの金の指輪」。この少女にみとれて主人公は轢死する。

## (3) 車中の女

この小説を読んでいるといくつかの疑問が浮かぶ。

まず(1)なぜ妻(女3)と大して歳も変わらない女1が登場し、しかも主人公はそれに強くひきつけられるのか、という点である。

女1はすでに22,3歳で、「少女」と呼ぶにはあまりにとが立ちすぎている。しかも主人公の妻(女3)は25,6歳。たいして歳もちがわない。それなのに主人公は女1には欲情し、妻には関心を失っている。「ちょっと変ではないか」。読者がそう思うのも無理はない。だがそこがこの作品の趣向だったと思われる。

この小説を書いた田山花袋は当時、少女小説家であり、年齢も主人公と同じ37歳。代々木の郊外に住み、博文館の編集者として甲武線（現在の中央線）と市電を使って通勤していた。だから主人公は花袋自身をモデルにしているといつて良いだろう。しかし花袋の妻「里さ」はこの明治40年に28歳であり、それに対してこの小説の主人

公の妻は25,6歳で、花袋の妻より2,3歳若く設定されている。なぜ主人公の年齢が花袋と同じなのに、妻の年齢は若く設定されているのか。それは主人公が欲情している女1と主人公の妻とがあまり年齢差がないことを読者に気づかせるためにほかならない。そもそも、女1じたいが妻の年齢に近い女としてあえて登場させられていると思われる。

なぜそんなことになっているのか。

それは主人公の欲情が、単に「若い女」に対する欲望ではなく、あくまでも「電車で出会う女学生」に向けられたものであることを強調するためにほかならない。(最近では作者の意図というものを探るのを放棄する読み方もあるようなので、言い方を変えるなら、すくなくともこの作品はそうした趣向を作品自身にはらんでいる)。つまり主人公杉田は単に若い女性というのではなく、むしろ電車という、当時としてはきわめて新奇で特殊な空間で出会う女性に強く欲情しているのである。

## (4) 女学生

もちろん、車中の女性たちは女学生、あるいは女学校卒に特徴的な風俗を身にまとっている。1899年(明治32年)の「高等女学校令」制定以降、高等女学校は急速に普及し、女学生は新しい風俗として定着していった。この「女学生」たちはどうして主人公の欲望をあれほど喚起したのだろうか。

まず「女学生」(現在なら女子大生・女子高生)というのは、単なる女性ではなく、特殊な記号をまとった存在として明治において出現したといえよう。作中でもそれはたえず、束髪(庇髪)、ノート・本、袴…といった「女学生」としての記号を身にまとっている。

記号論<sup>9)</sup>的にいうならば、「女学生」とは「女」と「学生」という、欲望の対象と禁欲的勉強という、二つの相反する記号からなっている。ある者にとっては「女」は「性的対象」を意味する。反対に「学生」は禁欲のイメージをもっている。つまり「女学生」とは「誘いつつ拒む」あるいは「拒みつつ誘う」存在という記号として立ち現れるのである。つまり「イエス」と「ノー」との間を振り子のように動くもの、すなわちジンメル<sup>10)</sup>の言う「媚態」(コケットリー)をあらゆる記号としてそれは現れる。

とりわけ小説の最後に登場するガラス越しの女学生(女8)は、欲望の対象の提示と遮断によってより欲望の喚起する存在となって主人公杉田を死に追いやる。それはちょうどショーウインドウの中の商品にも似ている。

## (5) 交通がもたらす死

だがそれにしても主人公はなぜ唐突にも小説の最後に死んでしまうのだろうか。(じつは発表当時から主人公

の唐突な死に対しては批判が多かった)<sup>3)</sup>。

まず遠因としては明治40年上野で実際に開催されていた「東京勸業博覧会」からの帰り客が多数乗り込んできたということがある。

「お茶の水から甲武に乗換へると、をりからの博覧会で電車は殆ど満員、それをむりに車掌のいる所に割り込んで、兎に角に右の扉の外に立つて、確りと真鍮の丸棒をつかんだ。」

もちろん、直接原因は主人公が電車から落ちて反対路線を走る電車に引かれたことである。だが真の原因は、その落車の原因となった、女8への欲望、すなわち電車(鉄とガラスの箱)のなかの女への欲望である。

「美しい眼、美しい手、美しい髪…白い襟首、黒い髪、鶯茶のリボン、白魚のような綺麗な指、宝石入りの金の指輪——乗客が混合つて居ると硝子越になって居るのとを都合の好いことにして、かれは心ゆくまで其の美しい姿に魂を打ち込んで了つた。」

彼はこの直後に落車して轢死する。

新時代の装置、市電は、名前も知らない若い女性とくたびれた中年作家とを、つかの間だけ同じ空間に詰め込む。それによって欲情した主人公は轢死する。つまり女たちを乗せる交通によって喚起された欲望に翻弄された主人公がまさにその交通によって殺される、という構図がこの作品のまさに趣向なのである。

## (6) 車中の空間

ここでバスや電車などの車中の空間というものについてすこし考えてみよう。

同じ高校生の一団がバス停から乗り込む。普通なら十分乗り込める人数なのに、積み残しがでてしまう。よくあることである。ではそれはなぜなのか。答えは、顔見知り同士だとどうしても一定の距離を互いにあけてしまうからである。満員のバスや電車では互いを人だとは思わず、物のように思い、また自分も物になったような気持ちでいなくては乗り込むことはできない。

満員電車やバスでは個々人のテリトリーの空間は他人によって脅かされる。私たちはその脅威に対して次のように対処する。

- 1) 他人を人格とはみなさないで無関心を装う。
- 2) 別の自分だけの空間を作る。

たとえば読書によって自分だけの仮想空間をつくってそこに逃げ込む。田舎の電車では本や漫画を読む人がすくないのに、都会の電車では本や週刊誌や漫画を読み、電車をでるとき棚に捨ててしまう人が多いのはそのためである。(ちなみに、あまり混まない名古屋の電車の中では本を読む人は、ひどく混む東京の電車よりも、少ない)。

あるいは現代ならウォークマンで音響の個人空間を作っ

てそこに逃げ込むことができる。両耳に固定したステレオ・ヘッドフォンのおかげで、体(頭)の位置を変えても音楽空間はそれに応じて位置を変える。ウォークマンの音楽空間はたえず自分を中心軸として構成されている。公的空間が耐え難いものである時、この私的空間に逃げ込むことができるわけである。さらに本もウォークマンもなくとも、妄想の世界を作り上げそこに入り込むこともできる。主人公杉田がしていることもそれに近い。

ウォークマンをしているとその音楽のために外界の世界がふしぎな輝きや意味を帯びて見えてくることがある。では主人公の車中の妄想をつうじて見える「少女」たちはいかなる意味と輝きをおびているのであろうか。

## (7) ガラス箱の中の女たち

この小説のなかでは執拗に女たちの持ち物が列挙されている。それはなぜなのだろうか。

まず言えることは、主人公「かれ」の目に映る「少女」たちはさまざまな部分へと細分された存在なのだという事である。

まず「少女」たちの描写をみてみよう。

「栗梅の縮緬の羽織をぞろりと着た格好の好い庇髪の女の後姿」。また「鶯色のリボン、繻珍の鼻緒、おろし立ての白足袋」。あるいは、「はでな縞物に、海老茶の袴を穿いて、右手に女持の細い蝙蝠傘、左の手に紫の風呂敷包」など。

女たちはさまざまな衣服や持ち物へと分解され、人格ではなく、むしろそうした衣服と小物を展示するための白いマネキンのようにさえある。

主人公を死にいたらしめる女の描写をもう一度みてみよう。

「お茶の水から甲武[電車]に乗換へると、をりからの博覧会で電車は殆ど満員、それを無理に車掌の居る所に割り込んで、兎に角に右の扉の外に立つて、確りと真鍮の丸棒をつかんだ。ふと車中を見たかれははつとして驚いた。其硝子窓を隔ててすぐ其処に、信濃町で同乗して、今一度是非逢ひたい、見たいと願つて居た美しい令嬢が、中折帽子や角帽やインバネスに殆ど押しつけられるようになって、丁度鳥の群に取巻かれた鳩といったような風。」

「美しい眼、美しい手、美しい髪…白い襟首、黒い髪、鶯茶のリボン、白魚のような綺麗な指、宝石入りの金の指輪——乗客が混合つて居ると硝子越になって居るのとを都合の好いことにして、かれは心ゆくまで其の美しい姿に魂を打ち込んで了つた。」

電車は鉄とガラスの箱である。その箱の中に「中折帽子や角帽やインバネス」とならんで「令嬢」がいる。しかしいまや主人公の眼には、彼女は一個の人間というよりも、「美しい眼、美しい手、美しい髪・・・白い襟首、

## 田山花袋作「少女病」を読む

黒い髪、鶯茶のリボン、白魚のような綺麗な指、宝石入りの金の指輪」という欲望を喚起する物の集積として現れる。

電車という交通の機関により次々と登場する女たち。しかもそれは一個の人間であるよりも、むしろ欲望を喚起するさまざまな部分部分へと細分化される。そして主人公のまなざしは、その細分化した部分の集積をなめるように移動していくのである。

ここで主人公杉田が小説中でのオナニストであると指摘されていることに注目しよう。オナニストとは、直接的交渉よりも想像のなかで実物の代償となるもののイメージによって欲情している、そうした存在である。つまり実体ではなく、記号によってみずからの欲望の喚起するそうした人間である。

ところで我々をとりまく消費世界とは、そもそも品物が意味する使用価値でなく、それ自身が輝く世界である。それは記号としての物がそれ自体輝き人を魅了する世界である。

そこは、使用価値ではなく、商品がそれ自体で輝く世界であり、いわば記号の乱舞による欲望の喚起がおこなわれている。商品の集積は欲望喚起の記号の集積として立ち現れる。

主人公杉田見ている、市電というガラス箱の中の人物は、すべて衣服や髪型や持ち物によって表現される。つまり人を表す記号としての品物がガラス箱のなかに溢れんばかりになっている。それは、ちょうど人々の欲望を喚起してやまない、ショーウインドウの商品のように、現れているのである。主人公杉田はそうした商品のごとき少女の輝きにこころ奪われたために命をおとしたのであった。

## (8) まとめ

市電という新しい交通メディアは、『少女病』という欲望、それまでになかった欲望を喚起した<sup>4)</sup>。主人公はその欲望に飲み込まれるようにして死ぬ。その欲望の世界では欲望を喚起する品物とそれに喚起された欲望によって引き裂かれた人間とが存在する。田山花袋の『少女病』は、近代都市がはらむ新たな欲望と人間の解体を予知する先駆的作品だったのである。

1) 吉田精一(編): 明治文学全集67 田山花袋集, 67-71, 筑摩書房, 東京, 1968.

2) Eco U.: A Theory of Semiotics, Indiana University Press, Bloomington, 1979, 池上嘉彦訳, 記号編, 岩波書店, 東京, 1980. などを参照。

3) 『少女病』については、『主人公の生活が十分現れ

ず、その性格が不明なところから、単に一個の病理的現象を書いたものという感がある。主人公の年齢が三十七、八で子どもの二人ある人とは受け取りがたい。結末主人公が電車から落ち死ぬもの作偽にすぎる』(片山伸「田山花袋氏の自然主義」明治41年4月『早稲田文学』)との批評がある。たしかにこの作品は書き込みが足らず、筆致が荒く、とりわけ主人公の描写にはひとりのみこみのところがある。特に最後の死は突飛で「作偽に過ぎる」といえるだろう。」(吉田精一(編): 明治文学全集67 田山花袋集, 388, 吉田精一による「解題」)。

4) ちなみに市電の登場と同時に痴漢というものも登場していたらしい。

## ● 婦人専用電車

## ▽ 不良少年の 誘惑予防

乃木大将もかつて、学習院女学部の生徒が電車に乗ると、男子が兎角生徒の体に触れたがって困ると、電気局員に語られたと記憶するが、

▲ 花電車を狙う: 近來不良学生が、山手線沿道より市内各女学校に通う女学生のいずれも同一時刻に乗車するを機とし、混雑に紛れて或いは付け文、或いは巧妙なる手段を以って誘惑し、しからずとも女生徒の体に触れ、その美しき姿を見るを楽しみとする風がある。彼等はこの女学生の満載せる電車を称して、「花電車」と呼んで居るが、今回中野、昌平橋間に各駅から婦人専用電車を、朝の八時半前後と午後の三時半前後に数回運転せしむることに決定し、この電車を女学生が利用するようにと、お茶の水附属女学校、女子学院、千代田女子学校、双葉女学校、三輪田女学校、精華女学校等に対し通知し、来る31日より実施することになった。

▲ 女学生客の減少: 右の就き中部管理局員は語って曰く、「外国の例は知らぬが、日本ではこれが最初である。兎に角名案たるに足るだろうと思う。これを運転せしむるに至った動機は、従来男女学生間の風儀を乱すような事が少なからず、牛込や四谷駅長からの申し出もあり、調べて見ると、女学生の客は次第に減って居る。そして遠いのを我慢して、車や徒歩で通学して居るものがだいぶあると云うことが判ったからである。婦人専用電車と云うのは、二台連絡する後のに婦人専用と札を掛け、前車には男子を乗せることにするつもりだ云々」と語った。

(平成13年10月9日受稿)

(平成13年12月25日受理)